

持続可能な森林経営を目指して 利根沼田森林組合の取り組み

SGEC森林認証林

皆伐施業地における生物多様性の保全の検証

◆溝又入区域の概要と検証の目的

所在地：群馬県利根郡川場村大字溝又入

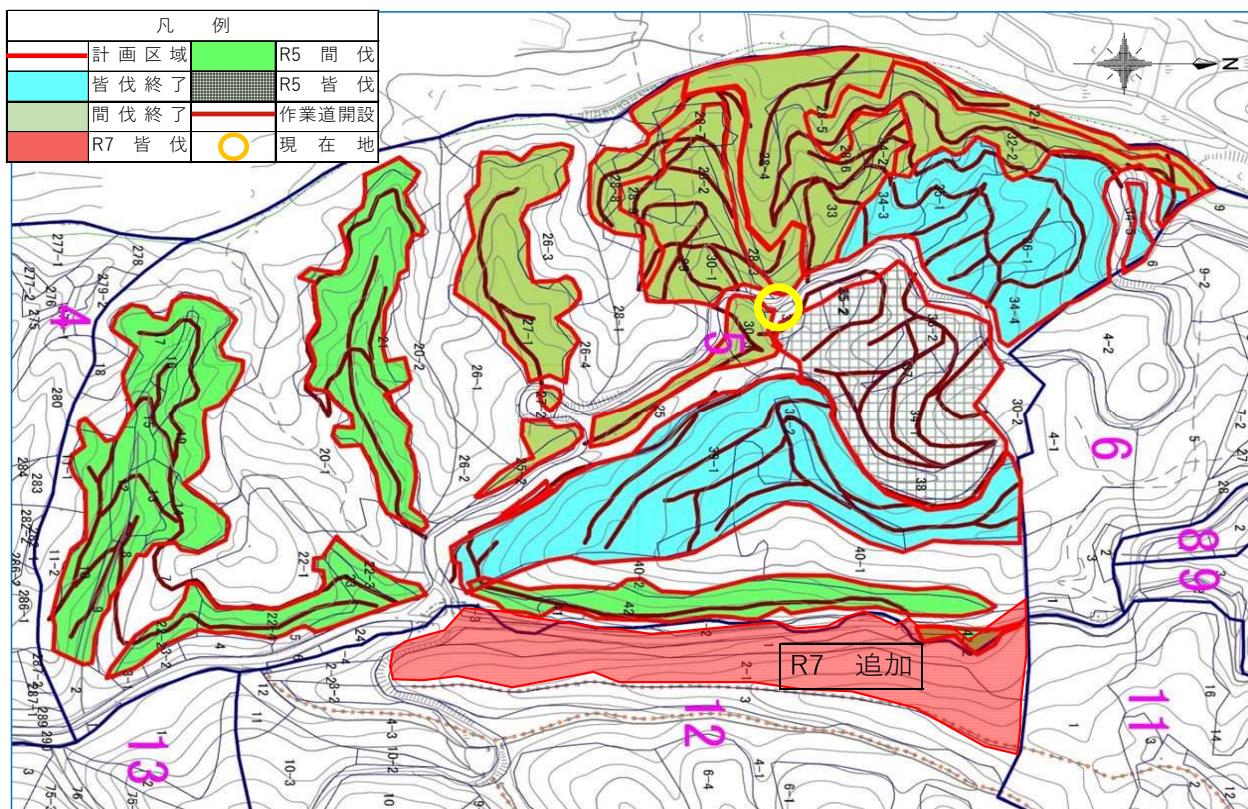
所有者：天神生産森林組合

溝又入工区の施業計画は、間伐22.25ha、皆伐面積15.32ha、樹木の構成は、スギ70%、マツ20%、カラマツ10%で樹齢はいずれも50年を超えていました。

素材生産量は皆伐：5,706m³、間伐：2,241m³ 合計7,947m³でした。

なお、R7年度は沢を挟んだ東側4.14haを追加し皆伐施業地を行っています。

施業実施にあたってはSGEC森林認証の指針に基づき、針葉樹以外の広葉樹を極力残し、渓畔もできるだけ手を入れないよう保全に務めました。特に皆伐施業地は環境の変化が大きく生物多様性の保全に逆行することが懸念されることから、経過観察と検証を行い、今後の施業に生かすことを目的とします。



◆伐採後の推移

令和3年度 伐採施業地

伐採搬出 2021/4/20

植え付け

2021/11/6

生育状況

2025/10/29



令和5年度 伐採施業地

伐採前 2021/12/17

皆伐植栽 2023/11/20

2025/10/29



残存広葉樹の役目

従来、人工林においては、保育等の作業効率や同一規格材の一斉収穫等経済面が重視され、収穫時の皆伐では作業効率向上のため、当たり前のように全て伐採していましたが、引き換えに裸地化による表土の流出が環境を変化させ、生物多様性へ与える負の影響も大きいことが懸念されていました。

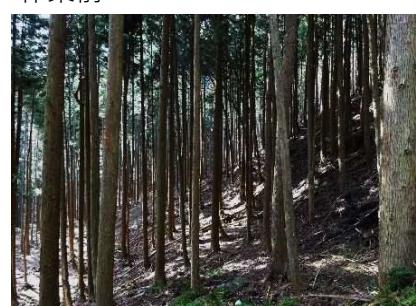
そこで、生物多様性保全と有用広葉樹の育成を目的に、伐採目的樹種以外の広葉樹等をできるだけ残す「生物多様性に配慮した」森林施業に取り組みました。

手探り状態でしたが、この度の(株)環境指標生物様との共同研究では、伐採により残置された枝葉を整理した棚は昆虫類の住み家となり、残存広葉樹が木陰を提供し巣巣や隠れ家、餌となる葉っぱや木の実が提供され、小鳥や動物の生息域が広がり、食物連鎖の頂点に立つ猛禽類が止まり木として利用するなど生物多様性が広がったと評価されました。

また、皆伐後の草原の効果は周辺に間伐林や広葉樹林帯があってこそ多様性が発揮されるということです。その他にも水源の涵養・土砂流出の緩和・景観の保全への効果も期待されます。

◆間伐作業の経過

作業前



作業中



完了



◆その他の保全状況

渓畔林の保全



混交林



作業道回復状況



森林資源の活用と生物多様性を学ぶ

ついでに林業とネイチャーポジティブも考える

■利根沼田森林組合・(株)環境指標生物 共同研修会の目的

山の担い手である利根沼田森林組合（以下「森林組合」）と、フィールドの最前線で生きものと向き合っている(株)環境指標生物（以下「BIO」）の職員が、林業施業地において「林業の視点」と「生き物の視点」を融合させた幅広い視点に立ち、自然環境への影響と推移を調査を行いました。

※森林組合は二日間全ての現場を停止し、技術職員全員が参加

■森林組合が得られるもの

SGEC森林認証を取得し施業しているが、生物多様性の観点からの評価や課題がわからないことから、動植物の豊富な知識と情報を有するBIO専門技術者と共同調査を行うことにより知識を深め、業務の意義を評価し、生物多様性について模索するきっかけとしたい。

・得られたもの

生きものからの視点で、施業地をとらえ直すことができ、施業内容とのつながりを実感できた。

林業とネイチャーポジティブは相反するものではなく両立の可能性を確信した。

■(株)環境指標生物が得られるもの

山地の担い手である森林組合で実際に作業している林業技術者の視点を学び、知識を深め、生物多様性の観点と併せてより良い提案ができるこを目指す。

・得られたもの

なんとなく想像していた林業を実感することで、施業と生きものの実際の関係を伝えられた。

■研修の概要

期間：11月6～7日 2日間

参加者：森林組合31名、BIO社25名 計56名

11月6日

※森林組合参加者には群馬県森林組合連合会職員2名を含む

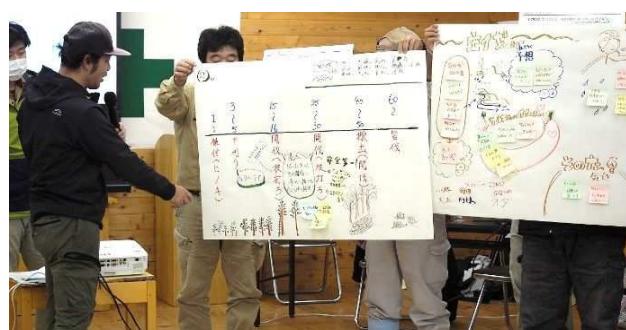
林業各種作業の体感

森林組合にてオリエンテーション後、伐採、間伐、下刈り作業を班別に見学し、体感する。

森林整備により森に与える影響をそれぞれの視点で具体的にイメージする。



野外活動で得た具体的なイメージを話し合い書き出し発表する。



11月7日
生きもの調査。

担当ゾーン内の生物調査を環境指標生物技術者が主体となって行った。



調査により発見された動植物を分類し林業施業との関連性を整理し表にまとめた。



各エリアごとに調査結果を発表し、様々な疑問点について活発な議論が行われた。



●結果（速報）

伐採跡地には広葉樹の残存木が多く、早期に植栽が行われ下草の回復は早い。周辺のスギ林、広葉樹林に加え、伐採による草地の出現が動植物の良好な生息環境に繋がることが認められた。河畔の樹木を残したことから影響は限定的であり、魚類を始め水生生物生育環境が保たれていた。



R7.12.4 版